

研究ノート

三陸復興国立公園のビジターセンターの現状と課題

— 特に来訪者への災害情報の発信に向けて —

Current Situation and Issues at the Visitor Centers in
Sanriku Fukko (Reconstruction) National Park

-Toward dispatch of the disaster information to visitors-

佐々木 啓*・八幡 直輝**

SASAKI Satoshi・YAHATA Naoki

要 旨

本研究は、三陸復興国立公園に整備されている7つのビジターセンター（以下、VCという）を取り上げ、とくに来訪者への災害情報の発信へ向けた視点から、その現状と課題を明らかにすることを目的とし、2019年に環境省やVCの職員を対象としたヒアリング調査と資料調査、現地調査を実施した。その結果、6つのVCにおいて、自然災害や周辺地域の情報など、来訪者に本来提供されるべき情報の提供が不十分であることが分かった。そして、東日本大震災で甚大な被害を受けた大船渡や南三陸、石巻といった地域のVCであっても、災害情報について情報発信する意向は小さいことがわかった。また、VCの課題については、5つのVCで予算不足、人員不足が大きな課題として認識されていた。さらに、予算不足が施設や展示の更新ができない等、VC一般が抱える課題の要因にもなっていると考えられた。予算不足の解決のためには、行政からの拠出額の増加や物品販売によって収益を得ること、有料イベントの強化、環境保全協力金の徴収などの検討が必要である。

キーワード：三陸復興国立公園，ビジターセンター，展示，来訪者，災害情報

1. はじめに

1.1 研究の背景

ビジターセンター（以下VC）は、保護地域や観光拠点に位置し、自然公園等施設技術指針（環境省，2019a）によれば、来訪者に情報を提供する機能や自然とのふれあい体験の誘導機能等を

持っている（表1）。特に三陸復興国立公園のVCについては、東日本大震災をはじめ繰り返した津波等の被害を受けてきた地域に位置することから、災害情報の発信も重要な機能の1つと考えられる。「災害情報」は文部科学省の原子力防災基礎用語集によると、広義では災害に関する一切の情報である。また、分類すると、①平常時の災害

表1 VCの機能(基本機能)

①利用のための案内・情報提供機能

利用者の自然公園の適正な利用を助けるため、利用地点や興味地点などの案内、自然の状況や利用状況に関する情報、周辺地域で提供されているアクティビティ、宿泊施設、飲食店などの利用に関する情報、気象情報、自然災害に対する情報などの各種情報を提供する機能

②自然および人文などの解説機能

利用者の自然公園などの理解を深めるため、自然公園制度の紹介のほか、対象とする地域の地形と地質、動植物、自然現象、歴史、人文などに関する情報を利用者によりわかりやすく解説する機能

③自然とのふれあい体験の支援・誘導機能

利用者が直接自然とのふれあい体験をするための支援や自然とふれあえる場に誘導する機能

④休憩場所提供機能

快適な休憩利用を提供する機能

⑤便益機能

トイレ、シャワー、着替えスペース、飲食場所、物品販売や飲み物、軽食、食事の飲食販売などの施設および公園利用のためのサービスを提供する機能

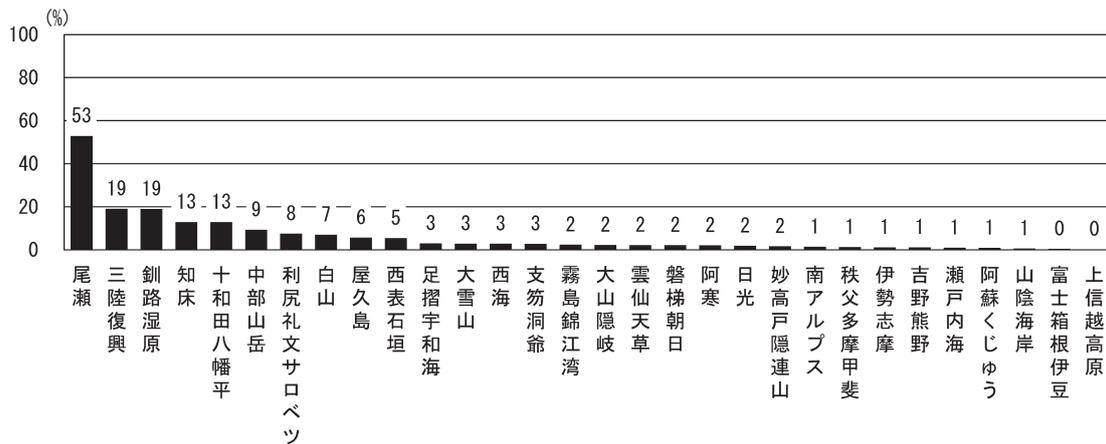


図1 日本の国立公園のVCの利用率

啓蒙情報, ②災害発生直前の災害予報と災害警報, ③災害発生直後の災害関連情報, ④復旧と復興の過程の災害関連情報があげられる (文部科学省, 2020)。本研究では, 災害情報を「災害に関する一切の情報」として定義し, 取り扱うこととする。

一方で, 日本の国立公園のVC利用率を自然公園利用者数等調 (環境省, 2019b) から算出すると, 尾瀬国立公園のVC等一部を例外としてその利用率は数%台と低く (図1), 今後はVCの利用率の向上による機能の発揮が求められている。

1.2 関連する先行研究と研究の目的

これまでの保護地域におけるVCの現状や施設内容に関する研究には, 環境庁と都道府県の担当技術者を対象としたアンケート調査から, 立地, 施設内容, 施設規模, 展示の解説対象と形態, 付帯施設についての, 自然公園技術者の理想とするVC像を把握し, 現状と比較して考察したもの (油井, 1983), 国立公園と国定公園内に整備されているVCや博物展示施設, 動物園など教化施設の分布状況と施設構造などを考察したもの (石井・油井, 1986) アメリカ西部地域の国立公園内に整備されているVCの実態を明らかにしたもの (油井, 1995) 等がある。

以上の既往研究は, 保護地域のVCについての知見を提供しているが, 災害情報の発信機能を含めて, VCの現状と課題を調査によって明らかにした事例はみられない。そして, VC研究全体をみても, スマートフォンなど, 屋外からでもインター

ネットに接続できるモバイル通信機器の普及により, 情報の発信と収集にこれらを使う割合が顕著になってきている近年の状況を踏まえたVCの施設内容や現状を調査したものは見当たらない。

また, 東日本大震災の被災地である三陸の海岸地域について, 被災地という視点から災害情報や災害の発信を取り扱った研究は多いが, 観光地としての視点から考察したものは見当たらない。

そこで, 本研究は三陸復興国立公園内のVCを対象に, VCの展示内容, 取り組み等の現状と課題を把握することを目的とした。

1.3 同公園のVCを調査対象とした理由

三陸復興国立公園のVCは東日本大震災の被災地域に位置する, 自然とのふれあいや観光に関わる施設である。既往研究でも, 自然とのふれあいが防災意識の向上に寄与すること (三好ほか, 2013) や東日本大震災の被災地の来訪者から効果的な災害の発信方法として観光を通じた方法が支持されていること (佐々木ほか, 2018) が知られていることから, 調査対象地とした。

2. 研究の方法

2.1. 調査対象地とそのVCの概要

三陸復興国立公園のVCは, 種差海岸, 北山崎, 浄土ヶ浜, 碇石海岸などの風景地などに立地し, 来訪者に対して情報提供などを行っている。三陸復興国立公園は, 東日本大震災の前年2010年は589万人が利用していたが, 大震災が発生した

2011年には46万人に減少し、その後2000年には338万人まで回復したが、東日本大震災以前の利用者数に回復するまでには至っていない（環境省，2019b）。

同公園は、1955年に普代から釜石までの地域が陸中海岸国立公園として指定された。その後、1964年に釜石から気仙沼の区域が、さらに1971年に久慈から普代の区域が拡張された。そして2011年に発災した東日本大震災を受け、2013年に八戸から階上の公園区域が拡張し、三陸復興国立公園へと名称変更された。さらに、2015年には気仙沼から石巻の公園区域が拡張されている（環境省，2015）。同公園の指定理由は、「海岸地形は岩手県宮古市以北の海食崖と段丘面からなる海成段丘と同市以南のリアス海岸に分けられ、豪壮かつ優美な自然海岸の景観を有している。」（環境省，2015）ことによる。この景観を保護することを目的として国立公園指定を受けた地域である。

同公園の公園計画書には、「自然の脅威を学ぶことのできる利用等を進める」と記載がある（環境省，2015）。また、三陸復興国立公園の一部の地域（八戸から気仙沼）は、三陸ジオパークとしても設定されており、日本ジオパークネットワークの三陸ジオパークの紹介には「東日本大震災からの復興にもつながるとともに、三陸地域に限らず世界の人々が次の津波災害に備えるため、私たちの経験や教訓を伝えていくことも目的としています。」（日本ジオパークネットワーク，2020）とあり、同公園には傑出した自然風景を提供するだけでなく、東日本大震災をはじめとする自然災害の災害情報を発信する役割があるといえる。

本章では、この同公園に整備されているVC、つまり、種差海岸インフォメーションセンター、北山崎VC、浄土ヶ浜VC、碓石海岸インフォメーションセンター、唐桑半島VC、南三陸・海のVC、石巻・川のVCの7つのVCを研究対象とした。

種差海岸インフォメーションセンターは青森県八戸市に位置し、種差芝生地に隣接するように整備されている。八戸市の東日本大震災の死者、行方不明者数は2名である（消防庁，2014）。北山崎VCは岩手県田野畑村に位置し、北山崎駐車場か

ら北山崎までの徒歩ルート上に整備されている。田野畑村の東日本大震災の死者、行方不明者数は32名である（消防庁，2014）。浄土ヶ浜VCは岩手県宮古市に位置し、浄土ヶ浜第1駐車場に隣接している。宮古市の東日本大震災の死者、行方不明者数は567名である（消防庁，2014）。碓石海岸インフォメーションセンターは岩手県大船渡市に位置し、碓石海岸駐車場に隣接している。大船渡市の東日本大震災の死者、行方不明者数は496名である（消防庁，2014）。唐桑半島VCは宮城県気仙沼市に位置し、風景地である御崎岬まで徒歩10分程度の地点に整備されており、津波体験館が併設されている。気仙沼市の東日本大震災の死者、行方不明者数は1,428名である（消防庁，2014）。南三陸・海のVCは宮城県南三陸町に位置しているVCである。南三陸町の東日本大震災の死者、行方不明者数は836名である（消防庁，2014）。石巻・川のVCは宮城県石巻市に位置している。石巻市の東日本大震災の死者、行方不明者数は3,965名である（消防庁，2014）。

2.2 調査方法

まず、2019年1月-6月に、三陸復興国立公園のVCの現状と課題を全般的に把握するため、環境省東北地方環境事務所へのヒアリング調査を実施するとともに、VCの職員へのヒアリングと資料調査を実施した。また、補足的に文書での問い合わせを行った。調査内容は、VCの運営体制や職員数、情報発信の状況などの基本情報、各VCのイベント内容と参加状況、各VCの運営課題である。そして、東日本大震災の被害が相対的に大きく、かつ、災害情報に関する常設の展示を実施していない碓石海岸、南三陸、石巻のVCにおいては、災害情報の発信に対する施設の考えを尋ねた。また、同公園内に整備されている7つのVCの展示内容等の把握のための現地調査を実施した。

3. 結果

3.1 各ビジターセンターの基本情報

各VCの基本情報について表2に示した。以下、詳細を記述する。

表2 三陸復興国立公園のVCの基本情報

VC名	種差海岸 インフォメー ションセンター	北山崎VC	浄土ヶ浜VC	碓氷海岸 インフォメー ションセンター	唐桑半島VC	南三陸・ 海のVC	石巻・ 川のVC
所在地	青森県八戸市	岩手県田野畑村	岩手県宮古市	岩手県大船渡市	宮城県気仙沼市	宮城県南三陸町	宮城県石巻市
整備年	2014年	2002年	2010年	2014年	1984年	2016年	2018年
整備者	環境省	岩手県	環境省	環境省	宮城県	環境省	環境省
利用者数 (2018年)	97,582人	15,891人	320,603人	82,833人	13,482人	12,655人	13,959人
職員数	3人	4人	5人	5人	4人	5人	
開館時間	4-11月: 9:00~17:00 12-3月: 9:00~16:00	9:00~17:00	4-10月: 8:00~18:00 11-3月: 9:00~17:00	8:30~17:15	8:30~16:30	9:30~16:30	9:30~16:30
Webでの 情報発信 (2018年)	ホームページ (20回更新) Facebook (54回更新)	ホームページ (固定ページ)	ホームページ (71回更新) Facebook (178回更新)	ホームページ (40回更新) Facebook (48回更新)	ホームページ (固定ページ)	ホームページ (18回更新) Facebook (154回更新)	ホームページ (18回更新) Facebook (194回更新)
刊行物	TANECHAN (年2回発行)	なし	浄土ヶ浜VC ニュースレター (年4回発行)	なし	なし	VISI (年2回発行)	
休憩設備	10席程度	5席程度	50席程度	5席程度	5席程度	10席程度	5席程度
便益機能	トイレ, 研修室, 休憩所併設(軽 食販売&土産 品販売)	トイレ, 飲食物 販売	トイレ, 自動販 売機(飲料), オリジナルグ ッズ販売	トイレ, キャン プ場併設	トイレ, 自動販 売機(飲料), 土産品販売	トイレ, 更衣室, シャワー室, 実 習室, 研修室, 作業ヤード, オ リジナルグッズ 販売&カフェ	トイレ, 更衣室, シャワー室, 実 習室, 研修室, 作業ヤード, 物 産館併設
施設面積	450m ²	128m ²	1,489m ²	346m ²	469m ²	991m ²	519m ²
構造	平屋	平屋	4階建て	平屋	平屋	2階建て	平屋
運営者	種差海岸イン フォメーション センター運営協 議会	NPO法人体験 村・たのはた ネットワーク	浄土ヶ浜VC 運営協議会	大船渡市 観光物産協会	唐桑町観光協会	フィールドミュージアム運営協議 会	
年間事業費	1千万円未満	不明	約1千万円	無回答	約640万円	約800万円	
立地	利用の中心地	公園等の入口	公園等の入口	公園等の入口	公園等の入口	特定地区の 利用拠点	特定地区の 利用拠点
施設タイプ (立地以外)	地区解説型 分担型 野外連携型	地区解説型 分担型 野外連携型	総合解説型 中央型 野外連携型	地区解説型 分担型 野外連携型	地区解説型 分担型 野外連携型	地区解説型 特殊役割型 野外主体型	地区解説型 特殊役割型 野外主体型

三陸復興国立公園のVCは、東日本大震災以前の陸中海岸国立公園時代に唐桑半島VC(1984年)、北山崎VC(2002年)、浄土ヶ浜VC(2010年)が整備された。東日本大震災以後、三陸復興国立公園が設立された後に残り4つのVCが整備された。唐桑半島VCと北山崎VCはそれぞれ宮城県、岩手県が整備したVCであり、その他は環境省が整備したVCである。

年間利用者数については、浄土ヶ浜VCが300,000人強(2018年)と突出して利用者が多く、種差海岸インフォメーションセンター、碓氷海岸インフォメーションセンターが100,000人弱(それぞれ2018年、2017年)でそれに続き、その他のVCが10,000人強(2018年)でさらに続く状況となっている。

職員数は、2人から5人であり、開館時間は、季節によって変わるVCもあるが、9時前後から17時前後の開館である。また、Webでの情報提供については、すべてのVCがホームページでの更新を実施しており、5つのVCではFacebookで

も情報発信を実施していた。そして、4つのVCでは紙媒体の刊行物による情報発信も実施していた。

休憩設備については、浄土ヶ浜VCは50人程度が休憩できる設備があり、その他のVCでは5人から10人程度が休憩できるスペースがあった。

便益設備については、すべてのVCにトイレがあるほか、VCごとに様々な特徴があった。例えば、種差海岸インフォメーションセンターでは休憩所が併設され、軽食やお土産品の販売が行われていた。そして、南三陸・海のVCでは、野外体験の際に利用できる更衣室やシャワー室が整備されていた。

また、同国立公園内の各VCにおいては、自然および人文などの展示解説や、自然とのふれあい体験といったイベントなども行われており(3.2以降で詳述)、いずれも一般的にVCが備えるべき施設としての要件を備えている。

表3 三陸復興国立公園のVCの展示内容

VC名	自然公園制度	地形・地質	動物・植物	自然現象	歴史・人文	利用・興味地点	周辺地域情報	災害情報
種差海岸 インフォメーションセンター	○	◎	○	○	○	○	○	—
北山崎VC	—	○	◎	—	○	—	○	—
浄土ヶ浜VC	○	○	○	○	○	○	◎	○
碓石海岸 インフォメーションセンター	○	○	○	—	○	◎	○	○
唐桑半島VC	—	○	○	○	○	○	○	◎
南三陸・海のVC	○	—	◎	—	○	—	—	—
石巻・川のVC	○	—	◎	—	—	○	—	—

※◎：展示あり（展示量最多のジャンル）、○：展示あり、—：展示なし

3.2 展示内容

環境省（2019a）を参考に、10種類に展示のジャンル分けをした上で、各VCにおいて、それぞれの展示のジャンルに該当するものが展示されているかについて表3に示した。なお、毎日更新されたり、Web上で確認されたりすることの多いと考えられる自然や利用の状況と気象情報のリアルタイム情報と利用者が操作して好きな映像を見ることができるモニターについては、対象とはしなかった。これは、一定期間展示されていると考えられる展示、利用者がすぐに見ることのできる展示を把握することを企図したためである。

種差海岸インフォメーションセンターでは、自然に関する展示が展示量の半分程度を占めていた。具体的には、花、里、山、草原、海岸、沖合、磯、砂浜などについて地形別にその特徴や自然現象や動植物の解説がなされていた。他には、文人、種差海岸エリアや周辺地域の情報、三陸復興国立公園の紹介、みちのく潮風トレイルの紹介などの展示が整備されていた。しかしながら、災害情報の展示は整備されていなかった。

北山崎VCでは、鳥、花、貝などの動植物の展示が展示量の半分程度を占めていた。その他、みちのく潮風トレイルや北山崎の地形・地質的な成り立ち、三陸ジオパークの紹介、海の生き物に関する漢字や方言についての展示などが確認できた。しかしながら、災害情報の展示は整備されていなかった。

浄土ヶ浜VCでは、国立公園制度の紹介、三陸復興国立公園全体の案内や周辺観光、地形、特産

物、歳時記、海の恵み、海の脅威、みちのく潮風トレイル、動植物、浄土ヶ浜エリアの歩き方など、幅広いジャンルの情報が展示されていた。災害情報の展示である海の脅威の展示は、昭和三陸大津波などの過去の津波災害の概要や、その被災者が体験談を語る映像などで構成されていた。

碓石海岸インフォメーションセンターでは、碓石海岸の案内図や見どころなどの公園案内が大半であり、その他、周辺で見られる植物、震災前後の景観変化の写真展（一定期間のみの企画展）、浜辺の植物、リアス海岸の紹介、日本の国立公園などの展示が確認できた。企画展としては災害情報に関する展示が行われていた一方で、常設の展示としての災害情報の展示は行われていなかった。

唐桑半島VCでは、津波体験館が併設されていることもあり、過去の津波災害や災害と向き合ってきた人々の歴史に関する、災害情報の展示が大半であった。具体的には、過去の災害の被災の様子の写真や過去の災害をまとめた展示パネル、津波の動きの模型などである。その他、動植物、地形、宮城オルレ、みちのく潮風トレイル、三陸ジオパーク紹介などの展示が確認できた。

南三陸・海のVCでは、サケの一生、カメの一生、樹木などの動植物の展示が大半を占めていた。他には日本の国立公園制度の紹介や、南三陸地域のみちのく潮風トレイルのマップやマガキの養殖などの展示が確認できた。しかしながら、災害情報の展示は整備されていなかった。

石巻・川のVCでは、ヨシや川に住む魚などの動植物の展示が大半を占めていた。他には、日本の国立公園の紹介やトイレ使用の環境影響に関する展示が確認できた。しかしながら、災害情報の展示は整備されていなかった。

6館で特定のジャンルの展示が展示面積の半分以上を占めていた。また、災害情報の常設の展示は浄土ヶ浜VC、唐桑半島VCのみで実施され、一定期間のみの企画展は碓石海岸インフォメーションセンターで実施されていた。

3.3 イベント内容と参加状況

2018年度に実施されたVCのイベント内容と参

表4 三陸復興国立公園のVCのイベント内容と参加状況

VC名	クラフト体験	セミナー	お祭り	トレッキングなど	自然観察会	環境整備など	その他野外活動
種差海岸インフォメーションセンター	1506人	207人	—	82人	—	31人	—
北山崎VC	不明	—	—	—	—	—	—
浄土ヶ浜VC	558人	26人	—	81人	56人	25人	—
碓石海岸インフォメーションセンター	318人	—	340人	27人	68人	—	—
唐桑半島VC	—	—	1000人	—	—	—	—
南三陸・海のVC 石巻・川のVC	31人	235人	—	31人	75人	20人	102人

VC名	クラフト体験	セミナー	お祭り	トレッキングなど	自然観察会	環境整備など	その他野外活動
種差海岸インフォメーションセンター	常時	8回	—	4回	—	2回	—
北山崎VC	常時	—	—	—	—	—	—
浄土ヶ浜VC	60日	1回	—	7回	3回	2回	—
碓石海岸インフォメーションセンター	89日	—	1回	1回	4回	—	—
唐桑半島VC	—	—	1回	—	—	—	—
南三陸・海のVC 石巻・川のVC	常時	14回	—	5回	5回	5回	12回

クラフト体験は複数日にわたって開催されることが多いため、日数で表記した

加状況について、表4に示す。

まず同公園内のVCで最も広く取り組まれているイベントとしてクラフト体験がある。常時開催されているVCが3館、2カ月から3カ月程度の長期開催が2館と、多くのVCでクラフト体験が長い期間開催されていた。参加人数としても、種差海岸インフォメーションセンターで、1,506人、浄土ヶ浜VCで558人、碓石海岸インフォメーションセンターで318人など、他のイベントと比較しても顕著に参加人数が多かった。200円から500円程度の参加費でプレートやチャーム、壁掛けなどの工作を作ることができる。

セミナーについては、種差海岸インフォメーションセンター、南三陸・海のVCと石巻・川のVCで多く開催された。いずれのVCのイベントでも特に料理教室が行われており、海にすむ動物の生態の座学の後に料理教室が行われる場合が多かった。また、それ以外にもシカの生態についてのセミナーやリスクマネジメントセミナー（浄土ヶ浜VC）が行われていた。

お祭りは、碓石海岸インフォメーションセンターと唐桑半島VCで行われ、どちらのVCも1回ずつの開催だったものの、それぞれ340人、1,000人と多くの参加者を集めていた。

トレッキング、ハイキング、ピクニックなどの

イベントは、クラフト体験と同様に多くのVCで行われており、セミナー同様、開催回数も多かった。特に、2019年6月に全線開通したみちのく潮風トレイルを半日から一日程度歩くものが多かった。

その他、VCの立地するエリアの生きものを観察する自然観察会やみちのく潮風トレイルのルート上の草刈り、ゴミ拾いなどの環境整備、キャンプやカヤック、SUPなどの野外活動なども行われていた。

これらのイベントによって、年間約5,000人がVCを訪れていた。災害情報に関するイベントは行われていなかったものの、イベントによって一定程度の利用者をVCに呼び込んでいた。

3.4 災害情報の発信に対する考え

東日本大震災の人的被害が比較的大きく、かつ、災害情報に関する常設の展示を実施していないVC、すなわち碓石海岸インフォメーションセンター、南三陸・海のVCと石巻・川のVCの職員に災害情報の発信に対する施設の考えについてヒアリングを実施した結果を以下に示す。

碓石海岸インフォメーションセンターでは、「企画展という形では実施したが、常設の展示としては難しい。災害情報について興味のある利用者には災害の伝承施設を紹介する」との回答だった。

南三陸・海のVC、石巻・川のVCでは、「発信していくつもりはない。イベント中に津波などの自然の脅威について伝えることはあるが、災害の伝承施設に任せる」との回答だった。

以上の結果から、大船渡、南三陸、石巻といった甚大な被害を受けた地域の施設であっても災害情報について発信する意向は小さいことがわかった。VCの災害情報の発信に消極的なことは大きな課題であるが、これについては考察のところで検討する。

3.5 運営上の課題

ヒアリング調査や文書での問い合わせによって把握した、各VCの職員や整備者の担当職員が考えるVCの運営上の課題の主なものは以下のとおりである。

種差海岸インフォメーションセンターでは、利用者の減少が課題であるとしていた。特に、種差海岸のリピーターである来訪者が、施設の展示に飽きてしまい、利用しなくなる、リピーター不足が課題として認識されていた。施設の設計上、展示を入れ替えるのは容易ではないため、そのことも利用者減少の一因と考えられていた。

北山崎 VC では、インバウンド、外国人旅行者への対応を課題としてあげており、特に、外国語への対応や、洋式トイレの整備が課題として認識されていた。

浄土ヶ浜 VC では、予算と人員の不足を課題としてあげていた。とくに、みちのく潮風トレイルのサテライトに指定され、必要とする人的リソースが増えたにもかかわらず、職員が増員されないことが大きな課題と考えていた。

碁石海岸インフォメーションセンターでは、人員不足が課題と認識されていた。とくに、大船渡市観光物産協会の職務と兼務であることから、人的リソースが不足しているとのことであった。

唐桑半島 VC では、施設の老朽化と人件費の不足が課題として認識されていた。VC が整備されて 35 年が経過しているが、展示の更新も停滞している。また、人件費についても不足分を運営者である唐桑町観光協会が賄っており、経済的な負担となっているとのことであった。

南三陸・海の VC では、利用者数の減少と人員不足が課題として認識されていた。利用者数の減少については、通行料金無料の復興道路である三陸自動車道が開通し、そのインターチェンジから離れた場所に VC が立地しているため、アクセスが不便になり、利用者数が減少しているとのことであった。

石巻・川の VC では、来館者がトイレだけ利用し、館内の展示を見ずに帰ることと人員不足が課題として認識されていた。石巻・川の VC は、北上観光物産交流センターに隣接しており、この施設にトイレが整備されていないことが原因であるとの認識であった。

このように、最も課題として認識されていたのは VC を運営するための予算と人員の不足であった。

4. 考察

各 VC の展示の内容については、7 館中 6 館の VC において、それぞれの地域の自然や文化資源に関わる展示量の大半を占めていた。そして、自然公園等施設技術指針（環境省、2019）と比較しても、自然災害や周辺地域の情報などといった、本来、利用者へ解説、提供されるべきジャンルの情報が不足していることが分かった。

また、種差海岸インフォメーションセンターでは、種差海岸のリピーターに展示が飽きられてしまったことが利用者の減少につながったと考えられている状況がある。リピーターにも関心を持たれやすいリアルタイム情報の必要性は古谷ら（2009）も指摘するところであり、リピーターのニーズも踏まえた展示に更新していく必要がある。

そして、石巻・川の VC ではトイレだけ利用し、館内の展示を見ずに帰る来館者が多いことが課題として認識されていたが、展示内容の大半が動植物についての解説であり、利用者の興味を引く展示になっていない可能性もある。今後は、利用者のニーズを踏まえた展示内容の検討が必要と考えられる。

各 VC で実施されているイベントとしては、クラフト体験が顕著に参加人数を集め、次いで、VC でのお祭りや料理体験などのセミナー、トレッキングなどが参加人数を集めた。一方で、災害情報の発信に繋がるようなイベントの開催は確認できなかった。

災害情報の発信に対する施設の考えでは、碁石海岸インフォメーションセンターでは、災害情報に関する展示について、「企画展という形では実施したが、常設としては難しい」とのことであった。

津田（2018）は、東日本大震災の被災地では発災からの時間経過によって、「心理的復興圧力」といった「いつまで震災による被災を嘆いているのか。復興に向けていい加減気持ちを切り替えるべきだ」というような精神的な圧力の高まりがあることを指摘している。今回のヒアリングでは明確な回答は得られなかったが、あるいはこうした負のイメージの強い災害情報に対する VC 側の意

識が、震災関連の展示の消極性を招いている可能性も考えられる。

一方、南三陸・海の VC と石巻・川の VC では「発信していくつもりはない」、「災害の伝承は他の施設に任せる」との明確な回答があった。これら VC の展示量の半分以上は動植物関係で占められていた。これには運営の主体を担っている NPO 法人（海の自然史研究所）の主な実施事業が海洋生物と科学教育の研究、環境教育であり（NPO 法人海の自然史研究所，2020）、専門分野外である災害情報をはじめ人間と自然とのかかわりあいに関する文化や地形、周辺地域情報の発信までは意識が及ばず、手が回らない事情もあったものと思われる。

また、他の 4 館ではヒアリングでの回答を得られたわけではないが、種差海岸インフォメーションセンター、北山崎 VC では、それらの立地する市村での東日本大震災の死者、行方不明者が比較的少なかった（消防庁，2014）。そのため、災害情報についての優先度が低いと判断され、展示が行われていないことにつながっている可能性も考えられる。一方で、浄土ヶ浜 VC は明治三陸大津波と昭和三陸大津波で壊滅的な被害を受けた田老地区を含む宮古市（国土交通省，2020）に位置しており、そして、唐桑半島 VC も明治三陸大津波において甚大な被害を受けた気仙沼市（佐藤，2018）に位置している。過去の津波災害での人的被害が大きかったことが、この 2 つの VC において災害情報の展示が整備される理由となった可能性もある。

各 VC の運営課題としては、5 館において、予算不足、人員不足が課題として認識されていた。先述したような施設の老朽化、展示等の外国語表記の欠如、洋式トイレの未整備、展示更新の未実施等の課題、そしてこれらの VC の管理運営に必要な人材不足等の根本原因は、VC をめぐる予算不足の問題として捉えることができる。予算不足問題の解決に向けては、行政等からの支援を増加させる手立てとともに、たとえばアメリカの VC のように物販に力を入れ多様な物品を販売することで収益を上げることや（油井，1995）、有料で

のイベントの強化、富士山（富士山における適正利用推進協議会，2019）や屋久島（屋久島山岳部保全利用協議会，2020）などのように国立公園の入場時に環境保全協力金を徴収することなど多様な視点からの検討が必要である。

5. おわりに

東日本大震災からまもなく 9 年が経過しようとしている。日本各地では現在までの間にも甚大な自然災害が頻発し、東日本大震災の記憶の風化が進んでいる。各地域や報道機関などでは、教訓を次世代へと受け継ごうとする活動が行われており、岩手県陸前高田市の東日本大震災津波伝承館がオープンから 4 カ月で入場者 100,000 人を達成したことなど明るいニュースもある。しかしながら、語り部ガイドの利用者の減少や震災遺構利用者の減少といった風化を裏付けるような事実もあり、そうした背景から、本研究では、被災地としてではなく観光地としての三陸の海岸地域に注目し、その情報発信施設である VC に注目して研究を行った。被災地としての性質は、発災からの時間経過によって薄れていく可能性があるが、観光地としての性質は三陸海岸の優れた風景が保たれている限り持続可能なものとして考えられるからである。この観光地としての枠組みの中で、災害情報を含む三陸地域の情報を、来訪者に情報提供を行う施設である VC を通じて発信することで、来訪者に災害の知識、伝承などの災害情報が伝わり、将来の災害における減災に寄与することを期待したい。

また、VC の展示内容や施設の考えとしての災害情報に関する態度は VC によって大きく差があり、浄土ヶ浜や唐桑半島の VC では津波災害の展示を実施しているのに対し、東日本大震災の被害が大きかった南三陸や石巻の VC において災害情報発信への関心が低かったことは三陸復興国立公園の VC の 1 つの課題を示しているといえる。さらに、各施設の課題として、予算不足が大きな課題となっており、この予算を確保できるかが、これからの VC のパフォーマンスを左右すると考えられる。予算確保のための方策の具体的な方策、そ

して、本研究ではVCの現状と課題を明らかにすることを企図した調査を実施したため、減災に向けたVCの活用の具体的な方策については検討できていないが、このあたりは今後の課題としたい。

(* 岩手大学大学院総合科学研究科・学生)

(** 岩手大学農学部・学生)

謝辞

本研究の実施と原稿の執筆に当たっては、比屋根哲氏(岩手大学大学院連合農学研究科)より助言をいただいた。また、本研究の調査の実施に当たっては、丹波未緒氏(種差海岸インフォメーショ

ンセンター)、楠田拓郎氏(北山崎VC)、佐々木洋介氏(浄土ヶ浜VC)、中野貴之氏、小松瞳氏(碁石海岸インフォメーションセンター)、千葉光広氏(唐桑半島VC)、平井和也氏、上田由美香氏、西條千恵氏(南三陸・海のVC、石巻・川のVC)、福濱有嬉子氏(環境省東北地方環境事務所国立公園課)、友野雄己氏、大友千夏氏(環境省東北地方環境事務所八戸自然保護官事務所)、福地壮太氏、古館百合子氏(環境省東北地方環境事務所宮古自然保護官事務所)、田宗史氏、坂本麻由子氏(環境省東北地方環境事務所大船渡自然保護官事務所)からご協力をいただいた。ここに記し、感謝の意を表する。

引用文献

- 石井弘・油井正昭(1986)：国立公園と国定公園内の教化施設に関する研究—博物館、植物園、動物園、水族館を対象として—。千葉大学園芸学部学術報告, 36, pp.37-46
- NPO 法人海の自然史研究所 (2019)：海の自然史研究所トップページ。
<http://www.marinelearning.org/index.html> (2020年1月2日)
- 環境省 (2015)：三陸復興国立公園 指定書及び公園計画書。
<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/151007b.pdf> (2019年12月29日)
- 環境省(2019a)：自然公園等施設技術指針。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2019/05/15/1416681_01.pdf (2020年1月25日)
- 環境省(2019b)：自然保護各種データ一覧。
<http://www.env.go.jp/park/doc/data.html> (2019年11月10日)
- 国土交通省東北地方整備局企画部企画課 震災伝承ネットワーク協議会事務局 (2020)：震災伝承施設田老防潮堤。
<http://www.thr.mlitt.go.jp/sinsaidensyou/sisetsu/facility/iwate-3-004.html> (2020年2月24日)
- 佐々木薫子・山本清龍・山本信次(2018)：東日本大震災後の石巻市の来訪者意識にみるダークツーリズムの課題と可能性。環境情報科学学術研究論文集, 32, pp.161-166.
- 佐藤健一(2018)：宮城県気仙沼市における取り組み。
<http://www.bousai.go.jp/jishin/tsunami/tsunamibousai/tsunamibousaiday141105/pdf/panell.pdf> (2020年2月24日)

- 消防庁 (2014)：平成 26 年度版 消防白書 附属資料 1 東日本大震災における市町村別死者数等及び住家被害等(平成 26 年 9 月 1 日現在)。
<https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h26/cat/740.html> (2020年2月24日)
- 津田喜章(2018)：市井の声に見る被災地の真実—震災 8 年 継続取材から分かったこと—。災害文化研究, 3, pp.2-14
- 日本ジオパークネットワーク(2020)：三陸ジオパーク。
<https://geopark.jp/geopark/sanriku/> (2020年1月25日)
- 富士山における適正利用推進協議会(2019)：富士山保全協力金。
<http://www.fujisan-climb.jp/manner/kyoryokukin.html> (2020年1月2日)
- 古谷勝則・一場博幸・栗原雅博・中島敏博(2009)：利用実態から見た尾瀬ビジターセンターの今後の方向性について。造園技術報告集, 5, pp.160-165
- 三好岩生・深町加津枝・奥敬一・中川健三 (2013)：宮津市宮津地区における自然災害および自然資源利用に関する住民意識。ランドスケープ研究, 76 (5), pp.627-632.
- 文部科学省(2020)：原子力防災基礎用語集 災害文化。
<https://www.weblia.jp/content/%E7%81%BD%E5%AE%B3%E6%83%85%E5%A0%B1> (2020年2月20日)
- 屋久島山岳部保全利用協議会(2020)：屋久島山岳部保全利用協議会トップページ。
<http://yakushima-tozan.com/> (2020年1月2日)
- 油井正昭(1983)：ビジターセンターの施設に関する研究。千葉大学園芸学部学術報告, 31, pp.19-29
- 油井正昭(1995)：アメリカ合衆国西部地域の国立公園のビジターセンターに関する研究。千葉大学園芸学部学術報告, 49, pp.131-141